

学会ハイライト

第67回日本皮膚科学会中部支部学術大会を終えて

(平成28年10月22日(土)、23日(日)・大阪国際会議場にて)

山西 清文

兵庫医科大学皮膚科学主任教授

はじめに

平成28年10月22日～23日に第67回日本皮膚科学会中部支部学術大会を大阪国際会議場(グランキューブ大阪)において開催させていただきました(図1)。兵庫医科大学皮膚科学教室が中部支部学術大会を担当しますのは、第32回(昭和56年開催 会長 相模成一郎 教授)、第51回(平成12年開催 会長 喜多野征夫 教授)に続いて3回目になります。お陰様で会期中に1,400名を超える皆様にご参加いただき、無事に終了できました。ご参加の皆様をはじめ、ご講演いただいた先生方、座長、オーガナイザーをお努めいただいた先生方、また、ご指導いただきました日本皮膚科学会事務局、ご後

援いただいた蘭芷(らんし)会(兵庫医科大学皮膚科学同門会)、兵庫医科大学関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

本学術大会のテーマ

われわれは日常診療の中で、皮膚科医として安全かつ科学的な根拠、あるいはコンセンサスにもとづいた皮膚科診療を提供する責務を果たさなくてはなりません。そのためには、社会からの要請に応じて、“皮膚疾患の真理”と“より適切な診療”を常に追い求め、日々努力する必要があります。そこで、今回の学術大会ではテーマとして、“学理と臨床のフロントライン”を掲げ、急速に進歩しつつある皮膚科領域のサイエンスと臨床について



図1 会長(前段中央)と主催事務局の運営スタッフ。

理解を深めていただく機会にしたいと考えました。本学会の第1日目は、私自身のライフワークである皮膚難病・難治性皮膚疾患と兵庫医科大学の研究の特色の1つである自然免疫をコアにし、第2日目は、実地医家の先生方を対象とした内容に重点を置いて企画をいたしました。

招待講演と特別講演

招待講演は、カリフォルニア大学デービス校(UCD)からSamuel T. Hwang先生をお招きし、皮膚疾患におけるケモカインの役割について講演いただきました。Hwang先生は、表皮角化細胞が産生するケモカインCCL20が結合する受容体CCR6をもつリンパ球(現在のTh17細胞)がインターロイキン-17(IL-17)を産生することを発見され、皮膚疾患におけるケモカインの機能について長年研究を進めてこられました。今回の講演では、日本からの留学生の皆さんの研究業績を交えながら、CCR6を発現する $\gamma\delta$ T細胞がIL-17を産生することや、CCR6を標的とした乾癬の新しい治療法の開発を中心に、ケモカインの役割をお話しになりました。Hwang先生は日皮会会員の先生方とつながりが深く、私自身2005年に、まだHwang先生がアメリカ国立衛生研究所(NIH)ご在職中に初めてお目にかかりました。Hwang先生はその後、ウィスコンシン医科大教授を経て、今年UCD教授に就任されました。今回のご来日は、旧知の会員の先生方とともに、Hwang先生のUCD教授ご就任をお祝いする絶好の機会にもなりました(図2)。

特別講演1では、ヒトのマイクロバイオーーム(微生物叢)について、わが国のこの分野の第一人者である東京大学名誉教授、現早稲田大学理工学術院先進理工学研究科教授の服部正平先生に講演いただきました。DNAの配列からマイクロバイオーーム全体の様子を解析する方法をメタゲノム解析と呼びます。服部先生は、日本人および12カ国のヒト腸内細菌叢の大規模な比較解析データを提示され、腸内細菌叢の特徴的な構成が日本人の低いBMIや長寿に関連することを解説されました。ま



図2 懇親会場。左から、佐伯秀久先生、島田眞路理事長、Samuel T. Hwang先生、馬淵智生先生。

た、皮膚のマイクロバイオーームは加齢とともに変化し、顔面では口腔内細菌叢由来の微生物が増加することを明らかにされており、その意義について、今後のご研究の展開が期待されます。

特別講演2では、保険医として遵守すべき診療のルールについて、大阪医科大学の上田英一郎先生に講演いただきました。上田先生は、元指導医療官として医療行政に携わった視点から、不当診療・不正診療の例を具体的に提示し、逸脱行為があった場合の行政処分について解説されました。保険診療の適切な運用のみならず、医療の質の向上のためにも、診療録の記載の重要性を改めて認識していただけたことと思います。

シンポジウム・フォーラム

シンポジウム1は「皮膚難病克服への挑戦」と題し、稀少難治性皮膚疾患の治療に向けた最先端の取り組みについて中部支部のリーダーの先生方に解説いただきました。大阪大学の玉井克人先生は、先天性表皮水疱症を対象に、HMGB1ペプチドを用いて骨髄間葉系幹細胞を誘導する研究開発の進捗状況を紹介されました。大阪大学の金田眞理先生はmTOR阻害薬を中心に結節性硬化症・神経線維腫症に対する分子標的薬の有用性を提示されました。名古屋大学の秋山真志先生は魚鱗癬・魚鱗癬症候群の診断・病態解析から新たな治療法の開

発について紹介され、神戸大学の錦織千佳子先生は、色素性乾皮症患者から樹立したiPS細胞の臨床応用を含め講演されました。どの先生方の取り組みも難病患者さんのQOLの改善につながる素晴らしい内容でした。

シンポジウム2「自然免疫と皮膚疾患」では、前兵庫医科大学学長の中西憲司先生が、兵庫医科大学で発見されたIL-18、およびIL-33がアレルゲン・IgE複合体がなくてもアレルギーの病態を引き起こす“自然型アレルギー”の概念を提唱するに至った研究成果を基調講演において紹介されました。当教室の今井康友先生(本学会の実行委員長)は、表皮および角膜・結膜上皮のIL-33の発現増加によってILC2が活性化され、アトピー性皮膚炎およびアトピー性角結膜炎が発症するという、新しいアトピー性皮膚炎の発症機構を提示しました。関西医科大学の神戸直智先生は、IL-1が発症に関わる自己炎症疾患の臨床的特徴と病態について、愛媛大学の村上正基先生は皮膚における抗菌ペプチドの機能・疾患との関わりについて最新の研究データを含めて解説いただきました。

シンポジウム3は、皮膚科医が注意すべき感染症対策にフォーカスした「迷わない！ 皮膚感染症の診療」を企画しました。基調講演は、兵庫医科大学感染制御部の竹末芳生先生に、手術部位感染(SSI)予防対策について講演いただき、とくにMRSA保菌者の術後感染予防のためのバンコマイシン予防投与、術中保温、術後血糖管理の重要性について、実際の臨床データにもとづいて解説いただきました。都立墨東病院 沢田泰之先生には、皮膚科医が遭遇する緊急対応を要する感染症について、壊死性筋膜炎や劇症型溶連菌感染症など、実症例を提示しながら診断・治療の実際について解説いただきました。岐阜大学の清島真理子先生は、ヒトパルボウイルスB19、CMV感染症で生じる多様な症状と対応について、早期診断、治療のポイントをお話しされました。新宿さくらクリニックの澤村正之先生は、最近になって再び増加傾向にある梅毒をはじめ、性器ヘルペス、尖圭コ

ンジローマなど、豊富な経験症例を提示しながら診断と治療について、実臨床に役立つ要点を提示いただきました。

美容皮膚科フォーラムは、「Don't be superficial! ~美容皮膚科へのいざないと学問のすゝめ~」と題して、第35回日本美容皮膚科学会総会・学術大会を開催される近畿大学奈良病院の山田秀和先生のオーガナイズにより、順天堂大学附属浦安病院の須賀康先生と東京女子医科大学附属成人病センターの根岸圭先生に講演いただきました。須賀先生は、美容皮膚科診療に際して皮膚の解剖・生理学の重要性を強調し、それにもとづいた治療目標を設定し、美容機器・薬剤を適切に選択することが大切と説かれました。根岸先生は美容医療のむずかしさについて述べ、ピコレーザーを含め、レーザー機器の安全で有効な使い方について具体的な手順を解説されました。適切な美容皮膚科診療推進に向けたフォーラムの啓発と提言は、美容皮膚科未経験の参加者の皆様にも大変好評でした。

教育講演・フロンタラインセミナー・CPC

本会では教育講演を「Review of Dermatology」として位置づけ、内容は、膠原病、血管炎、難治性自己免疫性水疱症、アトピー性皮膚炎、真菌症、皮膚外科の6タイトルに絞り、それぞれ、福井大学の長谷川稔先生をはじめ、中部支部の各分野のマスターの先生方に講演いただきました。どのご講演も臨床能力の向上に役立つ、素晴らしい内容でした。

また今回、教育講演とは別に“フロンタラインセミナー”を企画しました。このセミナーでは、京都大学の本田哲也先生をはじめ、本会のテーマに相応しい臨床および研究実績をあげておられる先生方に講演をお願いしました。次世代の皮膚科学を先取りするチャレンジングな内容のご講演もあり、とくに若手の皮膚科医に好評でした。

CPCは前年度の第66回学術大会の形式を踏襲し、皮膚病理のエキスパートの関西医科大学の清原隆

宏先生と神戸市立医療センター中央市民病院の村田洋三先生にオーガナイズいただきました。演者に、福本皮膚病理診断科の福本隆也先生、奈良県立医科大学の小川浩平先生を加え、メラノサイト系病変の臨床とダーモスコピー、病理組織の関連性を顔面、顔面以外、掌蹠、爪の部位ごとに、徹底的に考察いただき、診断困難な色素性病変の症例への対処に際して非常に役立つ内容でした。

一般演題・ポスター

一般演題・ポスターは全国の施設より症例・臨床研究等、175の演題を応募いただきました。免疫チェックポイント阻害薬に関する報告やエクソーム解析による診断など、話題の治療や診断技術を駆使した内容、貴重な症例提示があり、会場では、ご発表内容のレベルアップにつながる建設的な討論、意見交換が行われました。

おわりに

本学会を担当するにあたり、兵庫医科大学皮膚科学の研究・診療の特色に加え、会員の皆様の皮膚科学をもっと深く知りたい、より広く皮膚科診療の技能を磨きたいという熱意に応えるべく、さまざまな企画を考え、提供させていただきました。2日間の短い期間でしたが、ご協力、ご参加いただいた日本皮膚科学会会員の皆様のパワーに圧倒され、また、皮膚科学・皮膚科診療の目覚ましい進歩に感銘を新たにし、無事終了できましたことは、主催事務局・実行委員一同、感謝の念に堪えません。今回の学会が、ご参加いただいた先生方の研鑽や日常診療の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、学会開催に際し、運営事務局を担当いただいた株式会社サンプラネットメディカルコンベンション事業部の皆様、セミナーの共催、協賛をいただきました製薬業界、医療関連企業の皆様にも厚く御礼申し上げます。